

山王台だより 12月号



横浜市磯子区磯子5丁目2-1

TEL 045 (755) 1107

こもりがき 「木守柿」に学ぶ

校長 志田 一彦

校庭の周りの銀杏の葉が見事に色づき、落ち葉を踏みしめる音に秋の深まりを感じる頃となりました。11月は、3年生による区の音楽会、5年生による米の収穫、全校による読書集会やクリーン大作戦等、秋を感じる活動がたくさんありました。

いよいよ冬の到来です。子どもたちには様々な活動や体験を通して、全身で季節を感じ取ってほしいと思います。

さて、私の家の近所に大きな柿の木があります。毎日、その柿の木の側を歩いて通勤しているのですが、7月頃から緑の実を付けはじめ、今では、緑から橙にその色を濃くし、実りの秋の眺めを楽しませてくれています。

たわわに実っている柿の木を見ると、私はいつも思い出す話があります。「木守柿」という名前こもりがきの柿の話です。始めて聞く柿の名前でしたが、それはこんな話でした。

ある農家では庭の柿の木に実がなると、全部をとるのではなく、いくつかを枝に残しておくそうです。それは柿がたくさん実ったことに感謝して、自分たちだけで食べるのではなく、少しは自然に返そうという考えからです。

残された柿には「木守柿」という名前が付けられています。やがて、鳥たちがその実をついばみに集まってきました。その時、鳥は地面に糞を落とし、糞が柿にとっての肥料となったり、鳥が柿にとっての悪い虫を食べてくれたりします。また、鳥は食べた柿の種を遠くに運び、別の場所で新しい柿の木が芽吹くこともあります。

自分たちだけで全ての柿を食べるのではなく、いくつかを自然に返したことが、結局は柿のためになり、柿を守ることに繋がります。「木守柿」という名前にはこのような由来があるそうです。

「木守柿」の話は、私たちの生き方にも通じるものがあると思います。自分のことばかりではなく、周りの人のことも考えて行動すること、感謝の気持ちをもって生活すること、それがやがては自分のためになり、自分の幸せにつながるということです。私たちは誰かを支え、誰かに支えられて生きています。「木守柿」から人のありよう、人の生き方を学ぶことができます。

早いもので、今年のもくろみのカレンダーもあと1枚を残すのみとなりました。

子どもたちに大きな怪我や病気がなく、無事に年を越せること、そして、これからも安心安全な学校生活を送れることを願いながら、来年に向けて「何をどう生かすか」を考える月にしたいと思っています。

保護者の皆様や地域の方々のご支援、ご協力に感謝しつつ、少し早いですが、来年も皆様にとってよい年となりますよう、お祈り申し上げます。